

# ねりまの文化財

## 平成一〇年 文化財行事 事始め

毎年、年末から年始にかけては、区内で様々な文化財行事が催されます。皆様のご家庭でも年末の大掃除に始まり、正月の飾りつけをして、大晦日を過ごし、正月は、おせちで祝い、初詣に出かける方も多いと思います。生活習慣として根づいた民俗行事でもあります。今号では、平成一〇年一月に行われる文化財行事の中から皆様が見学できる行事を紹介いたします。

### ● 日一三日

#### 「江古田の富士塚」の開放

正月三日は、国指定重要有形民俗文化財「江古田の富士塚」が一般参詣者に開放され、登山することができます。「江古田の富士塚」は、富士山を信仰対象とする富士講によって江戸時代に築かれた塚です。直径約三〇mの円墳状で、ジグザグの登山道は富士の熔岩で造られ、歌碑や富士登山記念碑などの石造物が並んでいます。頂上には天保



- ・ 一〇年(一八三九) 銘の石祠があります。
- ・ 所在地 小竹町一―五九 浅間神社
- ・ 開放時間 午前9時頃―午後3時頃

### ● 日一八日

#### 「探湯の儀」

一月一八日午後2時頃から中村三丁目御嶽神社で中祭が行われます。祭りは区登録無形民俗文化財「探湯の儀」が行われます。

「探湯の儀」は、湯立て神事の系譜の儀式で、直径六〇cm程度の鉄釜で水を沸かし、修験者が火打ち石で清めた後、笹束を両手で持って、釜に入れ振り回し熱湯を浴びます。厳しい修験の一つであったものが、いつしか五穀豊穡や健康祈願など、民衆の願いを込めた民俗行事として行われるようになりました。

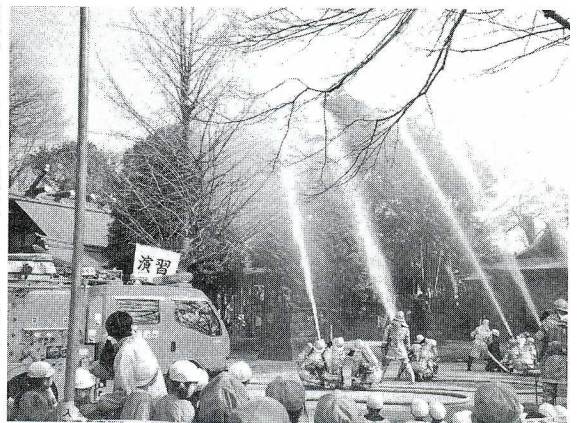
- ・ 場所 中村三一八 御嶽神社
- ・ 時間 午後2時から

### ● 日二六日

#### 「文化財防火デー」

毎年一月二六日は「文化財防火デー」です。全国でこの日を中心に大切な文化財を災害から守るために防火訓練などが行われます。

区内では、練馬・石神井・光が丘の各消防署が、消防訓練を管内の寺社などで



実施します。訓練は自由に見学できますので、多くの区民の皆様のお越しをお待ちしています。

ところで、「文化財防火デー」は、どのように定められたのでしょうか。

戦後の荒廃した社会において、文化財が売られたり放置される事態が生じました。このような状況の中で、昭和二十四年一月二六日、世界最古の木造建築、法隆寺金堂に描かれていた壁画が失火により灰塵に帰しました。この事を契機として、翌年には文化財保護法が施行されました。そして、法隆寺金堂の修理が完了した昭和二十九年に、一月二六日を「文化財防火デー」と決めました。

・ 開催場所、時間等の詳細は一月二一日号ねりま区報にてお知らせします。



「南大泉の町」

文化財保護推進員 荒井 道子

秋晴れの日曜日、区独立五十周年を祝う南大泉地区祭大泉第六小学校会場に出かけた。地場野菜・園芸の店も並び大勢の子供、大人が楽しげに集っていた。誰が放ったか風船が舞い上がる。ふと大泉六小の母体校大泉二小の校歌を思い出した。

この空をごらん むさし野の畑と林を  
つつんだ空を……あの富士をごらん……  
……この麦をごらん……

当時はこの歌の通り麦畑と雑木林の続く所であったと聞く。帰路、タイムスリップした気分で、南大泉の町を歩いてみた。

保谷駅東踏切の辺り、朝夕数十台の車が行列するこの道は、大八車に野菜を積み、帰りは下肥を積んできた道。今、若者の入ったコンビニエンスストアの入口は、かつては江戸時代の元号のある墓が並び、花が手向けられていた。今は移されて影もない。

西へ歩いてみた。この十年程の間に高いビルが幾つも建った商店街だが、わずか三〇年前には炭火でおばあさんがお団子を焼いて売っていた。今はビルとなり息子さんがお菓子を商っている。

南へ向きを変える。稲荷神社は神主さ

んが亡くなったあと鳥居と夏祭に活躍する神輿が置かれた場所の隣は公園になっていた。駐輪場や広い駐車場は、森と屋敷墓と麦畑の続く夏涼しい風の吹く所であった。ケーキのような建物のマンションの側に広い敷地の農家が残っている。

だが昼なお暗かった大銀杏の並木は無い。所沢道へ出る。この道は三宝寺前を通って富士街道を斜断、南大泉を経て保谷、所沢へと通じる道で、大体今の早稲田通りである。江戸期には「所沢へノ道」と記してあった。明治一三年の地図を見たが南大泉の主な道は現在とそれ程変化がなかった。道ぞいのTさんの広い庭先をのぞくと、いっぱい並んだ大きな樽に鉢巻姿の若い衆が威勢よく大根を漬け込む声がかえってくるような気がした。

南大泉の町が古記録の上で小樽村として出てくるのは、一五五九年(永禄二)に諸役負担の基準を明記した『小田原衆所領役帳』である。「小樽保屋九十八貫八六〇文、太田大膳亮知行」と記されている。白子川の流れに沿って早くから集落が発達していたと推定される。小樽村(南大泉・西大泉・大泉学園町の一部)とは、故加藤惣一郎氏(郷土史家)によると「樽とは皮のついたままの材木、屋根ふきに使う薄皮、樽木とは新炭材の木と考えられ、武蔵野の古歌などからこの

あたりは櫛、櫛、茅などが茂っていたので小樽の地名が生まれたと思う」とある。三丁目のナタナシの森や一丁目の雑木林の公園にその面影を合わせてみた。

江戸時代の『新編武蔵風土記稿』に「小樽村ハ……東ハ上白子村。及白子川ヲ隔テ。豊島郡土支田村ニ隣リ。西ハ本郡下保谷村。南ハ豊島郡関村。及郡内保谷村ニ堺ヒ。北ハ中澤辻両村ニ接シ。……人家三百二十軒。川越街道ノ内白子ノ宿へ人夫ノ定助ヲツトム。此アタリ用水ノ便アシケレバ。水田少ク畑多シ。……」とある。

一七〇三年(元禄十六)、江川太郎左衛門支配の時に村高の半ばが徳川譜代の米津出羽守の所領となったが、上小樽(南大泉)は代官領として残り、幕末に至った。一六四一年(寛永十八)に尾張侯の鷹場の内に小樽村も指定されているので、江戸中期以後は米津領と天領に分かれ、全体的には鷹場として尾張家の支配も受けるという二重支配地だった。

近世、新田の開発が進むと、南大泉は北から中前新田、前新田(大泉二小の辺り)、富士街道に至る辺りは大前新田となり、正保年間(一六四四―一八)は小樽村五四八石となった。

明治になって小樽村は、入間県、埼玉県の管轄を経て、明治二四年に東京府北豊島郡大泉村となった。昭和七年、上小

樽は初めて南大泉町として板橋区に属した。練馬区南大泉町となったのは練馬区独立の昭和二二年である。ちなみに南大泉町の人口・戸数は昭和九年一二〇八人、二二四戸であった。

前述の大泉二小は大正元年大泉小の第二分教場として開かれ、昭和一八年に独立した。当時の写真を見ると周りは一面の麦畑でヒバリがさえずるようなのかな風景である。保谷駅が池袋から四つめの駅として大正四年にできたが、学校から汽笛が聞こえ、汽車の通る様子がよく見えたという。その後人口も増え、昭和四五年大泉六小が分かれていった。

大泉二小を中心として撮った昭和二八年・四二年・五十年の三枚の航空写真は残っているが、並べて見ていると興味は尽きない。

南大泉の町巡りをして、最後に井頭池(ここから東大泉)から白子川を下って妙福寺に辿り着いた。八五〇年(嘉祥三)慈覚大師の草創といわれて南大泉に所在する多くの文化財がある寺。

庫裏に残る「からかさ造」は区内でも古い建築であり、徳川將軍の朱印状も残る。除夜の鐘は希望者にはつかせて貰える。明治に、北の新屋(保谷)の姑がよく聞こえたという鐘の音は、今はどこまでもとどくのであろうか。



練馬区の遺跡 ②

石神井川流域の遺跡

石神井川流域には区内で遺跡の数が最も多く、七〇箇所を数える。その内訳は、旧石器時代が二九箇所、縄文時代が五九箇所、弥生時代が一三箇所、古墳時代が九箇所、奈良時代が七箇所、平安時代が七箇所、中世が八箇所、近世が四箇所である。

富士見池遺跡群(No.38)は、関町北三丁目の台地縁辺に広がる遺跡で、保谷市下野谷遺跡に連続する。遺跡群は溜淵遺跡、武蔵関遺跡、天祖神社東遺跡、葛原遺跡A地点を含む。武蔵関遺跡では、旧石器時代の二〇cmはあったとされる大型の石槍が出土した。また、遺跡群では

縄文中期(四五〇〇年前)の竪穴住居跡が多数見つかった。対岸の関町北四丁目の川北遺跡(No.37)では、近世以降の陥穴があり、隣接する武蔵関北遺跡では縄文時代の同じような形状の陥穴が見つかった。

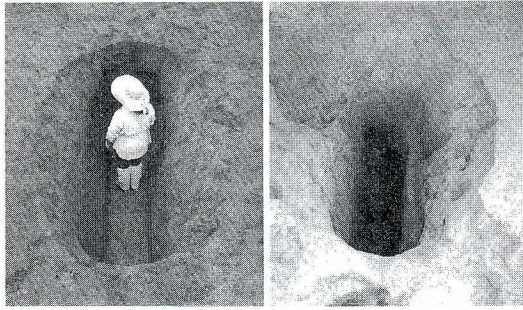
この他、流域には縄文中期の集落跡が多く、主な遺跡は、石神井台四丁目の扇山遺跡(No.57)、石神井町五丁目の池淵遺跡(No.64)(一部が遺跡公園として埋め戻し保存されている)、富士見台四丁目の堀北遺跡(No.86)、貫井二丁目の中村橋遺跡(No.89)と貫井二丁目遺跡(No.91)、小竹町二丁目の小竹遺跡(No.116)である。小竹遺跡では墓と考えられる土坑(穴)からヒスイ製の垂れ飾りが出土した。

弥生時代と奈良平安時代の集落跡が、貫井二丁目遺跡で見つかった。また、都内では珍しい奈良時代の土師器を焼いた跡や金銅製の帯金具が出土している。都の史跡として指定されている尾崎遺跡(No.98)は、春日町五丁目に所在する。低湿地帯から一一年以上前のカラマツなどの植物化石を含む江古田植物化石層が確認された。他に都内でも珍しい火鑽り臼(木製の火を起こす道具)が出土した。

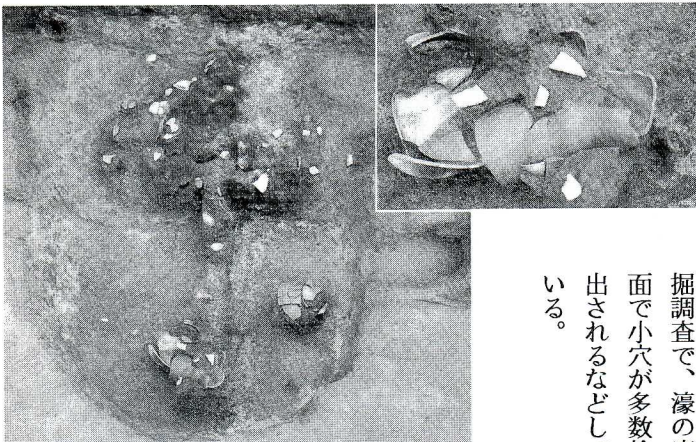
早宮三丁目の中宮遺跡(No.101)では、縄文早期(八〇〇〇年前)の竪穴住居跡の他、古墳初頭の完形の小型壺や高坏が集中して出土した祭祀跡が見つかった。

早宮一丁目の東早淵遺跡(No.143)では、弥生後期の方形周溝墓や平安時代の竪穴住居跡が調査された。遺跡の一部が史跡公園として保存されている。中世では豊島氏由来の城跡などが周知されている。石神井城跡(No.53)は石神井公園内に土塁や濠が残されている。向山三丁目の練馬城跡(No.130)は発掘調査によって濠の一部が確認されている。なお、上石神井三丁目の城山遺跡(No.45)・愛宕山屋(No.139)の発掘調査で、濠の底面で小穴が多数検出されるなどしている。

早宮三丁目の中宮遺跡(No.101)では、縄文早期(八〇〇〇年前)の竪穴住居跡の他、古墳初頭の完形の小型壺や高坏が集中して出土した祭祀跡が見つかった。



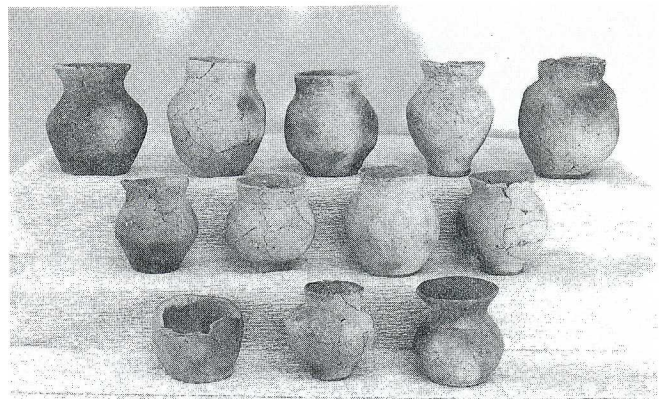
陥穴 左：縄文時代(武蔵関北遺跡)，右：近世以降(川北遺跡)



土師器を焼いた跡と甕(貫井二丁目遺跡)



祭祀跡(中宮遺跡)



小型壺(中宮遺跡)



『練馬の寺院』の改訂作業から

練馬区郷土史シリーズ『練馬の寺院 (平成八年版)』には四五の寺院(十一ヶ寺を数えると五五)を収録している。表1と表3は、この冊子をもとに作った。

表1は、『新編武蔵風土記稿』(安政一(一八一八)年)に書かれている練馬の寺院を宗派別にまとめた。表1では練馬で開山した寺院の大部分が新義真言宗の寺院で、これに次ぐのが法華宗(後の日蓮宗)の寺院であると読みとれる。その所在地は、新義真言宗寺院が練馬全域に広がっているのに法華宗寺院は練馬のほぼ西の方に偏っている。(新義真言宗は鎌倉時代にできた宗派で初めは和歌山の根来寺にあったが、豊臣秀吉の焼き打ちで一度は滅んだ。しかし法燈は奈良の長谷寺と京都の智積院にすぐに引き継がれ豊山派と智山派に分かれた。)

法華宗寺院の所在は、下総中山法華経寺から妙福寺への布教に始まり、妙福寺が中心になっていくから、西の方であることはうなずける。しかし新義真言宗寺院の場合、練馬全域になぜこの数のように盛んであったのか。またその半数の寺院が廃寺または合併されて現存できなかったのは、どんな事情によるのか。解明の必要を感じる。江戸時代における幕府の寺院対策、特に將軍綱吉時代の新義

表1 「新編武蔵風土記稿」に見える練馬の寺院

練馬で開山した寺院	宗派	現存している寺院(開山年・時代)		現在の宗派	練馬に現存しない寺院		
		宗派	現存している寺院(開山年・時代)				
練馬で開山した寺院	新義真言宗	1. 教学院	(文永5(1268)年・鎌倉)	真言宗 智山派 豊山派 智山派 豊山派 " " " " " " " " " " " " " " " "	1. 清性寺(金乗院に合併)		
		2. 南蔵院	(中興・14世紀・南北朝)		2. 威徳院( " )		
		3. 三宝寺	(応永元(1394)年・室町)		3. 松林寺( " )		
		4. 愛染院	(永享9(1437)年・室町)		4. 高德寺( " )		
		5. 禪定院	(15世紀・室町?)		5. 東林寺( " )		
		6. 円明院	(16世紀・室町)		6. 高松寺		
		7. 円光院	(永禄7(1564)年・室町)		7. 養福寺		
		8. 莊嚴寺	(16世紀・室町)		8. 泉蔵寺		
		9. 金乗院	(16世紀・安土桃山)		9. 成就院		
		10. 長命寺	(慶長18(1613)年・江戸)		10. 西光寺		
		11. 能満寺	(17世紀・江戸)		11. 南光院		
		12. 正覚院	(17世紀・江戸)		12. 真福寺		
		13. 寿福寺	(17世紀・江戸?)		13. 最勝寺		
		14. 光伝寺	(18世紀・江戸?)				
法華宗	法華宗	1. 妙福寺	(元享2(1322)年・鎌倉)	日蓮宗 " " " " " " "	1. 本応院(妙福寺塔頭)		
		2. 大乘院	(14世紀・南北朝)				
		3. 善行院	(15世紀・室町)				
		4. 妙延寺	(永禄11(1568)年・室町)				
		5. 法性院	(16世紀・安土桃山)				
		6. 本照寺	(16世紀・安土桃山)				
		7. 妙安寺	(17世紀・江戸)				
		8. 本立寺	(17世紀・江戸)				
天台宗	天台宗	——			1. 大覚寺(廃寺)		
		禅宗曹洞派	1. 道場寺		(応安5(1372)年・南北朝)	曹洞宗	——
			時宗		1. 阿弥陀寺(17世紀・江戸)		時宗
新義真言宗	新義真言宗	1. 宝蔵院(観蔵院)		真言宗 智山派	——		
		(文明9(1477)年転入・室町)			——		
法華宗	法華宗	1. 本覚寺		日蓮宗	——		
		(安政2(1855)?年・江戸)			——		

真言宗・長谷寺への関わり——綱吉生母桂昌院の信仰、長谷寺小池坊出身の護持院隆光の活躍などと関連づけると、練馬への影響も考察できるのではなからうか。表2と表3は、大きな災禍を受けて練馬に移ってきた寺院をまとめた。表2からは練馬に無かった四つの宗派が大正末から昭和初めにかけて移ってきたこと、表3ではすでにある宗派であることがわかる。そこで震災後と戦災後の移転とで

は、質的にかかなりの差違があったものと思われる。また表2の移転は罹災後二年(五年であるのに、表3では七年〜二十年を移転に要している。これはどのような事情が伴ったからであろうか。以上、『練馬の寺院』を編集しながら気付いたことや疑問に思ったことをまとめて見ました。調べて下さる方、教えて下さる方を期待しております。(郷土資料調査員 三上英男)

表2 関東大震災で罹災して練馬に移った寺院

寺院	宗派	移ってきた年	前所在地
1. 円照院(廣徳寺別院 昭和53年秩父へ)	臨済宗大徳寺派	大正14(1925)年	下谷
桂徳院(廣徳寺塔頭)	"	昭和30(1955)年	"
廣徳寺	"	昭和53(1978)年	"
2. 十一ヶ寺(通称)	浄土宗	昭和2(1927)年	浅草田島町 誓願寺塔頭 築地
3. 宝林寺	浄土真宗 本願寺派	"	"
4. 真龍寺	"	昭和3(1928)年	"
5. 敬覚寺	"	"	"
6. 南松寺	真宗 高田派	"	下谷南福荷町(松が谷町)

表3 戦災を受けた寺で練馬に移った寺院

寺院	宗派	移ってきた年	前所在地
1. 法融寺	浄土真宗大谷派	昭和27(1952)年	浅草 本願寺塔頭 田端町(北区滝野川)
2. 仲台寺	浄土宗	昭和36(1961)年	麻布今井谷(港区六本木) 札ノ辻(港区芝田町)
3. 法音寺	曹洞宗	"	"
4. 智福寺	浄土宗	昭和40(1965)年	"